



回 想

思い出すままに

小林 中

アジア経済研究所が、特殊法人として新発足してから、今年で20周年を迎えたと聞き懐旧の念、禁じ難いものを覚える。

想い起こせば、昭和32年8月のアジア関係学者有志の岸総理訪問を契機とするアジア調査機関設立の動きは、年を逐うて次第に具体化し、遂に昭和34年11月、「財団法人アジア経済研究所」として結実をみ、私は推されて理事長をお引き受けした。当時の事務所は、まだ丸の内永楽ビル3階の経団連分室を借受けたわび住まいであったが、やがて年末には新築間もない新大手町ビル5階に移転し、各界の名士500余名を招いて創立披露パーティーを開くことができた。席上臨席の岸総理からいただいた「一粒の種子は蒔かれた」との激励の辞は未だに耳朶に新たなものがあるが、その言葉のように、当時のスタッフは20人にも満たず、文字通りの「種子」にすぎなかった研究所が、今や300人にもなんなんとするスタッフを擁する大樹に育っていることは、まさに時代の要請に応えたものとして、まことに慶賀の至りである。私事ではあるが、当時のこの場所に、いままた私が事務所を構えているのも奇しき因縁といえよう。

研究所は、翌35年7月1日、特殊法人に改組され、同時に行なわれた機構改革で私は会長となり、新たに東畑精一先生を所長にお迎えし、その基礎を固めた。私は昭和43年まで在職し、研究所自体に顔を出す機会こそ少なかったが、当時から始まった日本の高度成長を上回る研究所の充実、成長については、いささかお役に立つことができたのではないかと自負している。

とりわけ、官・財界双方の全面的ご協力をえて、市ヶ谷台上に偉容を誇る新庁舎の建設に、ささやかながら力を貸すことができたのは、望外の喜びであつた。当時としては、イタリア産の大理石を用いたり、ロビーを広くとったりし

て、政府関係の建物としては、ややゆったりしたビルであったが、これもすぐ手狭となり、同居の国際協力事業団は新宿に移り、さらに新館も増設され、研究所の成長ぶりを如実に示している。

いまや開発途上国は、一方で産油国と非産油国、他方ではLLDCとNICS、自由主義圏と社会主義圏と、多元化の傾向にあり、南北問題は、ますます複雑多岐の様相を示しつつある。満20歳の成年を迎え国内は勿論世界にも誇り得る優れた研究機関に成長したアジア経済研究所が、みずから、さらに数多くの種子を育てて、時運の進展に対応していくことを切に祈ってやまない。

(元会長)



回 想

回想さまざま

東 畑 精 一

アジア研が創設されて満20年となった。この間のことについて何かの回想がある筈だから、それを記せというのが編集担当者のお話である。わたしは当初の10年間ほどは直接の関係者であった。前途を考えると、20年というのはなかなか永い時間であるが、過去を考えると、それほど永い時間ではない。いつの間にやら過ぎ去ったというのが通例である。このような表現はしばしば聞くところであるが、またわたしもそう思うものだが、しかし一寸検討すると、なかなか問題がある点だ。一言で表わすなら、その間に充実している歳月を送っているなら、そう単純に「短い」とはいえるものではない。まさに「永い」時間であったに違いない。わたしは「短い」と自分ながら思うが、少なくとも上記の10年間の勤務の期間は、わたしにとって充実していた勤務の時ではなかったからではないか、とひそかに感じている。自分が真に苦勞した若い頃を考えると、いつでも「あの頃は永い日々を送った」と感じているものである。どうもアジア研時代はそうでなかったらしい。

さてこの20年間にアジ研ならびにアジ研を取り巻いている研究の大勢は、日本の他の面におけると同様に、極めて大きく変化した。この点は全く20年一昔と云うであろう。ところでアジ研としてこの間に最も大きく変わったものは何であったか。わたしは所員一同の面がまえ、顔付き、挙措動作ではないかと感ずる。

発展途上国の研究というのは、東洋史の研究を除くと、設立当初は極めて貧弱、全く問題にならなかった。商社の報告、軽妙な旅行記の類のものが大部分を占めていた。インドに10年居住したというだけでインド通と自他ともに考えていたような有様であった。設立当時、多数の人に会っていろいろ話をかわしたが、その時に、わたしは思わず苦笑したことがある。自分は日本に何十年もおり、日本語もできるが、これが果して「日本通」の資格であるかという点であった。もしそうなら、日本人は悉く日本通だということになるわけだと苦笑したことであった。

こういう中でのアジ研の創設である。大学院の学生や大学卒業早々の所員が連年増してきた。ところが、そのだれもが、研究所内で研究について相談するような相手がない、文献にも通じ難い（まだ図書館が貧弱であった）、研究体制は整っていない、わたし自らに指導力がない、——こういう次第で、新入所員は研究者たらんとしても、全くやり場が無い有様であった。こんな処置にしたことは設立者としてわたしの大変な落度であった。新入所員は従って精神的落ちつきがなく、その顔付きには不平不満や欲求不満が現われていた。またその挙措動作は粗雑であったし、常にキョロキョロしていたのである。所員諸君と初めの頃に大いに争ったことがあったが、その源にはこういう精神的状況が背景となり、地盤となっていたのであった。

なんといっても研究所として最も大切なことは所員諸君が自らに自信をもち、プライドがあることである。これは絶対的必要条件であろう。いずれにしても、それからほど遠い、以上のようなのが初期の状況であった。

しかし20年の歳月の間には漸次に研究が積み重ねられてきたし、自らの研究の成果も現われ出した。殊に海外駐在の研究者生活を送ってきたことが、自らのプライドを培うこととなった。外国人との接触は日本人を重厚にした。——このようにして研究員諸君の顔付きは大いに変わり、動作は柔らかくおだやかになってきた。わたしはいつも10年間の顔写真を作っておけばよかったと思っていた。設立者としてわたしが最も喜び最も安んじたのは、この変化であったのである。

研究者個人以外に集団としての研究所についても似たような感じをいただいている。それは研究所自体が集団として甚だよく整備されてきた点である。これは研究所に対する自信を所員に傳えうることとなる。設備は整ってくるし、図書館は充実してくるし、東南アジアの特に統計の蒐集は恐らく世界有数であるし、地図については日本有数の蒐集であろう。そして必要な文献目録がどしどし発刊されることとなった。多数の特にアジアの国々の言葉のエキスパートが増してくる。このようにしてアジ研に対する一般世人や官庁の注目は強くなってきた。かくて全所員にとっても研究所は一つの誇りある機関となり、世人、特に外国人の注目と重視とが日に増して濃くなってきた。東洋諸国のなかで、世界のなかで、後進国研究機関としての大きな歩みがなされ得ることとなった。アジ研の顔付きも変わったのである。

以上のようにして、創設期、それにつづく時期に研究所員となった人々の功績は大きいし、そこには創業者的な喜びがある筈である。彼らにつづく後継者はどうであるか。創設期の所員とは異なって、彼らは初めから既に整備された研究所に入るのである。顔付きが和やかになった研究所に入るのであるから、入所早々から研究に没頭し、自らの問題を深く掘り下げていくことができる。当初のものが苦渋の途を歩まざるを得なかったのとは大いに異なる。既に敷かれた道を歩むことができる。

研究者に大切な自信につづいて、研究成果に対する自己批判がある。自らにまた自らの成果に甘えざることである。人々によって異なるが、およそ45歳～50歳ぐらいのころから、批判力がにぶって自分に甘えるようになるものである。世に中年のたるみということがあるが、これを研究社会にあてはめると、まさにこの批判力のにぶることを指すものと思われる。余程の努力を重ねないと、このにぶりを克服することができない、ある意味で運命的なことである。

アジ研の当初の所員は今やこのような年頃になりつつある。そこに新入生の使命があるのであって、自らの生々瀟灑たる精神で自らの研究を始める。その成果は恐らくは以前のものとは異なる色彩、着眼点、問題意識を盛ったものとなろう。以前のエリートとは異なる新たなエリートが茲に生まれる。そして新旧エリートが循環することとなり、研究集団が老化しないで常に再生の生命を永続させることができるのである。アジ研は今日20年の歳月を経て、この新しい段階に踏み入ろうとしているのではなからうか。新たな風貌を予報しながら今後の20年の途が始まるのであろう。

(元会長・所長)



回 想

アジア経済研究所 と私

小倉 武一

アジア経済研究所と私という表題を掲げましたが、ここでは、焦点を主としてアジ研が私に何を与えてくれたかの視点に絞ることに致します。

1) 研究所の仕事といっても、研究そのものよりも、研究管理ないし研究行政のことですが、これには一般の管理ないし行政と共通する面もありますと同時に、一般の管理ないし行政とは異なった特質もあります。その特質は、研究管理者ないし研究行政官が、研究とは何であり、研究者とは何であるかを認識する必要に求めることができます。

アジ研は、私のその種の認識を深めてくれました。何しろ、理事、所長、会長を通して10年内外の在職期間を経験したのです。もっとも、私は、アジ研に御厄介になる直前に農業機械化研究所の初代理事長、農林省農業改良局の再度にわたる局長、農林省農林水産技術会議事務局長、さらに同会長として、農業研究の管理を経験しました。さらに遡ると、しばらくの間でしたが、農業総合研究所で研究員の見習をしたこともあります。さらに非常勤ですが、ささやかな財団・農政研究センターの理事長の席を、この15カ年ほど汚しています。

したがって、研究管理については、ベテランである筈ですし、アジ研の役員時代でもそうであったと思うのですが、アジ研の管理が改善の方向を辿ったとは思われないのです。むしろ私の所長、会長の頃に管理の弛緩が起り始めたのではないかとさえ思われるのです。また、アジ研は途上国関係の研究者の養成を一つの機能としているわけですから、頭脳流出も社会的に価値あることですが、“良貨の駆逐”の謗りを受けはしないかと、私の所長、会長の頃にはそういう心配もしたのです。いまはアジ研を退職された桜井雅夫さんが、アジ研在職中に“そんな心配は無用”と慰めてくれるのですが。

さらにもう一つのことは、アジ研の研究ないし調査、総じてアジ研が“役に立たない”という批判も聞かれました。行政官や実業家の“役に立たない”という批判は問題にするに値しない点もあるでしょうけれども、そうであるとなれば価値ある研究や調査が行なわれているという認識が必要でしょう。なお、付記しますと、大内穂さんが紹介して下さったある実業家（インドで日系企業をマネージされた方）は“アジ研はわれわれに役に立つようにというような見地からの調査研究をする必要はない”という見識を披歴されました。私のアジ研所長の頃のことかと思えます。

とにかく、アジ研は、私に研究管理のむずかしさを改めて教えてくれました。

2)アジ研と日銀政策委員会を除きますと、私の職歴は、主として国内農政に限られていました。日本の農政は、どちらかといえば、インワード・ルッキングであって、アウトワード・ルッキングではありません。農学や農業経済学も国内農業に関するものが主であって、付随的に英、独、米、それから近年になってフランスの研究へと発展しました。農政の面でも、立案の参考は、主として米、英、独、仏の諸国についてでした。

そういう雰囲気の中で育った私にとって、アジ研は発展途上国の政治、経済、産業に眼を開いてくれました。とくに農業についてそうです。そして、途上国の農業改良に寄与するための研究の必要を感じさせてくれました。農林省に熱帯農業研究センターが設立されるようになったのは、この認識が一つの動機になったように思われます。この設立の前後に東南アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの諸国における農業研究と日本の農業技術協力を実地に見聞できました。大変むずかしいことかとも思いますけれど、日本農業と世界の農業というパースペクティブのうちに位置づけることもできたのです。この点については滝川勉さんをはじめ調査研究部の方々の教示によることが多かったのです。

日本における途上国研究者は、その研究分野ないし研究課題についての、日本での対応分野ないし対応課題についてもある程度の知識を必要とするかと思えます。その点が、従来は欠けていたように感じていましたが、近頃はこれが補正されつつあるように思われます。私の場合は、日本農業から途上国農業へだったのですが。

3)アジ研の研究成果は英（仏、西）文でも発表する必要を感じました。

私がアジ研に御厄介になり始めた頃、今は亡き或る知人が「アジ研は横のものを縦にするだけだ」と私に申したことを忘れません。縦書の日本語でも創意

ある論文がないということだったのでしょう。後になって、その知人にジャワ島の社会に関するユニークな調査論文のあることを知りました。戦争中のものだったと記憶します。“この人にして、この言あり”ということでしょう。

今は様子が変わりました。アジ研の研究者の手になる英文の論文や著書も刊行されるようになってきているのです。

私も役員の頃、日本の農地問題に関する英文の論文をとりまとめたことがあります。アジ研がそういう動機と機会を私に与えてくれたのです。それは、林武さんが担当課長のときでした。

こうした経験があって、昨年暮れ、私も日本の近代農政に関する書物を英文で刊行することができました。その題名は、“Can Japanese Agriculture Survive?”です。それは史的研究に比較研究の方法を加味したものです。よく“何故、英文にしたのか”と知人に尋ねられます。“英文では読みにくいし、役に立たない”というわけでしょう。流石にアジ研の方々からは、そういう質問を受けません。

岩田昌征さんや尾上悦三さんによりますと、私の今度の英文図書が励ましになるということです。研究者の方々からそういう声を聞くのは御世辞でも、幸せなことです。なお最後に残ったスペースを利用させていただくと、あの書物にはあまりに誤りが多いので、採算を無視して、第二版を出す準備をしています。アジ研創立20年史よりも拙著の第二版の刊行がおくれるかもしれません。とにかく小生の非力のこともあって、英文図書の著作が如何にむずかしいかを経験することになりました。

いまでも時々、アジ研の研究発表を聞かせていただいております。アジ研は私にとって決して過去のものではありませんが、アジ研に直接関係した日々の思い出として、三つのことを書きとめてみました。 (元会長)



回 想

アジア研に望む

岩佐 凱實

東畑精一先生から、アジア研の会長を引受けたらというお誘いがあったのは、いまから5年前、昭和50年、小倉武一会長が辞任される時であった。それまでアジア研については、かねがね、私も、アジア諸国のみならず、中近東、ラテン・アメリカ、東欧等についてまでも関心を持っていたので、アジア研が、これらの地域について、社会的・経済的な基盤、歴史、伝統、民族性、習慣、文化等について、地味な深い研究をしており、またこの研究からえられた知識に基づいて、よい分析、評価をしていることは知っていた。しかし、私は、そういう問題について関心はあっても、とりたてた学識も経験もないし、富士銀行のほうも、経団連の副会長としても、日常の雑務も相当多いので、職責を全うすることはできないと固辞したが、私が人格、学識について深く傾倒していた東畑先生が、創立者の1人として、かつ有力な育成者として、現在も顧問として情熱をこめて指導もしておられ、再三のおすすめもあったので、事実上の非常勤という形で、会長を今年の6月末まで、5年間お引き受けしたわけである。

さて、会長をお引き受けしての私の役割を考えると、経団連その他の私の活動分野からいっても、やはりアジア研というものを、そういう分野の中で、もっとクローズ・アップすることが、アジア研のためにも、経済界のためにも必要であるという、そういう使命感をもってこの5年間をすごした。しかし、その所期の目的がどの程度達成されたかということになると、自ら省みて、甚だ不十分、不満足な点が多いが、しかし、僅かながらにしても、私の努力が実ったのではないかと自負している。

アジア研に対する従来の世間一般の評価は、学界は別として、第三者的な政界・経済界からは、その存在、役割というものも、十分認識されていないし、ま

た認識している人々の中でも、一部にはやや批判的にみる人さえあった。その理由としては、象牙の塔にこもって、自らの研究を楽しんでいるだけで、その成果を社会に還元して活用するという気も乏しければ、努力も余り積極的でないという点にあった。

しかし、私が会長に就任してみると、研究所の職員の方々が、なかなか地道ないい研究を積み重ねてこられていることがよく認識できた。そこで、これをして、できるだけ社会に還元して、貢献していくという積極的な心掛けが必要ではないかということで、広報活動、「アジアトレンド」等の動向分析、あるいは文書の形のみならず、各種のセミナー、講演会等も、数多く行なわれるようになってきて、所長以下幹部の方にも、そういう点への関心を深められてきたように思う。

また、日本の経済力が相対的に世界の中で強くなってきたことと相まって、アジアと発展途上国の人達や先進国の研究機関との交流も漸次増加し、国際的活動の分野も非常に広がり、深まってきており、これもアジア研のいいあり方が表面化してきているように思う。

今や、日本の国際的な責任はますます重くなり、また世界全体もそれを期待している。そういう点から、日本の発展途上国での経済協力、民間企業の活動も、狭義の経済という視点だけでなく、もっと基本的な、相手国の社会基盤までも認識した上で取り組む必要が一段と増大している。こういう点からも、アジア研所員の方々の研究蓄積が一段と利用されるべきである。今後の国際交流は、単に経済交流のみならず、広義の文化交流なしには真の成果はあがらず、いたずらに不必要な摩擦を生むだけに終る懸念すらある。

もう一つは、いまや発展途上国では、いろいろな国際紛争が起きてきかねない情勢にあるが、それらの事件に対する評価・判断は、やはりその地域の基本的な文化構造、歴史、民族性、習慣等の知識を、ある程度持ったうえでくだすことが大切であり、単に現象面で判断するのは、ことを誤まる危険がある。私は、アジア研のそれぞれの地域の専門家から、これらの基本問題について説明を受け、大いに得るところがあった。

そこで私の望みたいのは、これからも発展途上地域等で事件が起こったときには、速やかに、現地経験も豊富で基本的な研究も積んだ人達が、それを社会——マスコミ、経済界、政界——に知識を進んで提供するという、一段と積極的な努力を望みたい。これは見方によっては、アジア研のPRともいえるが、そ

れはまた研究者としての社会的使命を果たしているのだという自覚と認識を持って、積極的にPRして頂きたいと望むものである。

最後に、アジ研の皆さん方が、あらゆる方面において、国際的、国内的に相和して一層活発な活動をされることを期待してやまない。 (前会長)



回 想

アジ研8年 — 思い出すまま

鹿子木 昇

十年一日の如く、コツコツと地道に、研究を積み上げていく研究者の毎日に、昨日と今日とを比べて、そこに大きな変化はある筈もないが、長い月日がたてば、おのずから、少なからぬ変化—進歩が見られるのが常である。研究者の集団であるアジ研についても、そのことがあてはまる。

8年余りの任期を終えて、今静かにふり返って見ると、アジ研も、色々な点で、大きな変容を遂げていることが、はっきりとわかる。

第一に、研究活動の国際化が一段と進んだことがあげられよう。海外からの客員研究員の招へいは、延べ人員100名を突破し、ヒルマ、中国からの招へいはじめて実現した。小倉元会長の発案と推進によって予算化された特別海外共同研究の事業も、回を重ねる毎に、内容も充実し、大いに研究交流の実をあげている。ASEAN 5カ国の投入産出表の作成は、アジ研統計専門職員の長期にわたる指導、協力によって、逐次完成し、それをもとに、日本との二国間産業連関表の作成の仕事もすすめられ、更に、韓国、アメリカ、オセアニア等を含めた環太平洋地域について、国際総合産業連関表を作成する事業が計画されている。また、ここ数年、毎年1回ないし2回の国際シンポジウムが、アジ研主催で開かれているが、参加する職員も、殆ど英語で、研究発表や討論を行っており、これも一つの大きな変化といえる。

第二は、受託事業の増加である。当初、殆ど外部からの受託を行なってい

なかったところに、通産省から相当大規模な受託事業の話があり、職員の中に、これを受け入れることに難色を示す向きがあって、私も何回か意見交換の機会を持った上で、これを受け入れた経験があるが、以来、既に7年を経過し、今では、経済開発分析事業として定着し、アジア研事業の一つの大きな柱となっている。その後、東京に本部をおく国連大学から、技術移転に関する日本の経験について、とりまとめの仕事を引き受けてほしいとの話があり、私自身は慎重な構えていたのであるが、今度は逆に、職員の方から、是非やらせてほしい、やってみせるとの申出があり、私も安心してお引き受けすることにした。5年継続の事業で、今はその中間の時期に当たるが、既にながりの成果を得て、公表もされ、内外からの高い評価を得ていることは、ご同慶に堪えない。そのほか、最近、総合研究開発機構や経済企画庁からの受託の仕事も行なっており、受託の殆どなかったときと比べると、全く様変わり之感がある。

第三に、広報活動の活発化をあげねばならない。もともとアジア研の目的は、発展途上国の調査、研究を行ない、その成果を普及することであり、広報活動がアジア研事業の大きな柱の一つを占めているのであるが、調査研究活動の多様化に伴い、広報活動の一層の積極化が要請され、これに応じて、各種の工夫、改善が行なわれた。外部からの照会の窓口を一本化するための資料情報相談室の設置、月例講演会の充実、公開基礎講座の開設、アジア研フォーラムの開催、季報「アジアトレンド」の発刊、月報「アジア研ニュース」の発行などが相ついで実施された。

そのほかの思い出として記憶に新しいのは、任期の終り頃、たまたま特殊法人の一部に不正事件が起こったのを契機に、特殊法人一般への批判が強まり、財政再建を目指す政府の予算削減方針とも相まって、客観情勢は、一時金支給額の自粛を必至ならしめ、この問題をめぐって、組合員の諸君と何度か直接交渉を持ったことである。

アジア研が創立20周年を迎え、東畑、小倉、両氏の培った芽が大きな幹となり、枝葉も繁ってきた。これからも世間の風は、時に強く、冷たく当ることがあるかも知れないが、それにめげず、まっすぐに伸びて、立派な花が一つでも数多く開くことを、切に祈ってやまない。

(前所長)